令和4年度　須崎市農福連携活動概要

○活動の状況

日程	活動項目	内　容
R4.6.9	第 1 回 農福連携分科会	①　分科会発足の経緯について ②　高知県における農福連携の現状について（報告） ③　農福連携を進めるうえでの各参画機関のかかわり方について
R4.7.7	視察研修（安芸市）	安芸市における先進的な農福連携の取組についての視察・研修。 （多機能型事業所こうち絆ファーム、安芸農福連携研究会等）
R4.10.5	第 2 回 農福連携分科会	①視察研修についての検証 ②就労継続支援事業所との連携について
R4.11.17	農作業体験会	市内シシトウハウスにて、B 型利用者が収穫作業を体験。
R4.11.25	農作業体験会	市内ブルーベリー農園にて、B 型利用者が除草作業を体験
R5.3.3	農作業体験会	市内ブルーベリー農園にて、B 型利用者が害虫駆除作業を体験
R5.3.20	第 3 回 農福連携分科会	①体験会についての報告 ②農家と B 型事業所の委託契約形態について ③引きこもりの方とのマッチングについて
R5.4.3	就労体験	市内ブルーベリー農園にて、知的障害者の就労体験。

【参加機関】
・一般農家　・B 型事業所　・JA土佐くろしお農協　・高知県農業会議　・須崎農業振興センター
・障害者就業・生活支援センターこうばん　・農福連携コーディネーター　・須崎公共職業安定所
・須崎福祉保健所　・須崎市福祉事務所　等

○明らかになったこと、成果、課題など

・最低賃金の適用される「一般雇用」の形だと、どうしても障害者雇用が進みにくい（特に須崎地区の農家は、被雇用者に求めるスキルが高い傾向にある）。
・就労支援事業所への「作業委託」の形であれば、出来高契約が可能なため、農家側、福祉側ともに連携を進めやすく、実際に2件の農家において、B 型事業所利用者が農作業を体験し、ブルーベリー農園のほ場作業等の委託につながった。
・ブルーベリー農園及び果汁搾汁工場において、就労体験の実施が可能になった。
・農家が、B 型事業所にほ場作業を委託する際の、委託金額の設定が難しい。
・連携が可能な農作業の掘り起こし（特にミョウガ関係）や、福祉側の潜在的な求職者の把握等を行っていく必要がある。
・農業者側、福祉側、ともに農福連携に対する関心度を高め、意識醸成を行っていくことが必要。

【社会就労センター山ももの家】（就労継続支援B型事業所）の取組について
※利用対象者：身体・知的・精神障害のある方

農福連携については、以前からシシトウのパック詰め、ミツバ、ニラの出荷調整に係る作業等（施設内就労）を行ってきたが、当該作業ではなかなか利用者さんの工賃に結びつかず、工賃向上及び受託作業の多角化等に繋げるため、R4年度より、特にほ場における作業（施設外就労）の受託を目指した取り組みを行っている（施設外就労については、知的・精神障害のある方が中心）。

＜R4．11．17　シシトウハウスでの収穫作業体験＞
農福連携分科会に参加されていたシシトウ農家さんのハウスで、シシトウの収穫作業体験会を実施した。
利用者さんが、収穫するシシトウのサイズ等が分かるよう、手袋にマークを付ける等の工夫をし、ハウス内の暑さ対策のため、こまめに休憩を取りながら行った。
収穫するシシトウが緑色で、葉っぱと色での区別がつかないため、難しい面もあるかと思われたが、支援員さん的には、「作業内容としては十分対応できる」という感触を持たれていた。

＜ブルーベリー農園でのほ場作業体験＞
須崎市内のブルーベリー農園（市川ファームさん）から、山ももの家へ声掛けし、農園（ほ場）での作業体験会を2回実施した（11月、3月）。
2回とも、収穫時期ではなかったため、草刈り機を用いた除草作業や、ピンセットによる害虫駆除等を行った。
害虫駆除等は根気のいる作業であるが、いずれの作業も特に問題なく行うことができた。

◎市川ファームさんとの連携
＜市川ファームさんからの作業委託＞
農園での作業体験会を経て、R5．3月より、「ブルーベリー等の栽培・収穫・出荷等に係る一連の作業」について、正式に作業が委託された（月単位）。
時期、天候にもよるが、週3～4回程度、支援者1名を含んだ6～7名（知的・精神障害のある方）で農園へ通い、これまでの作業としては、3～4月に害虫駆除、除草、ほ場にホースを敷く作業等、5月以降は収穫、選別等を行っている。
現時点で、目に見える山ももの家側の効果として、利用者さんが農園での収穫作業等について、非常にやりがいを感じていることや、工賃につながる収入面においても、R4年度の事業所としての収入と比較すると、今回の作業委託による部分で、R5年度は 15%ほどの収入アップが見込めている。
今後は、市川ファームさんが観光農園（ブルーベリー収穫体験等）を実施する際の補助や、キウイ等の生産に係る作業も行っていく予定。
この連携について市川さんは、「最初は様子を見る期間が必要と考えていたが、慣れてくれば十分に作業ができており、今後も期待できると思っている。また、山ももの家の支援員さんが非常に熱心に取り組んでくれているので、お互いに作業のすり合わせ等をしながら進めることができている。」と話されていた。

＜山ももの家におけるブルーベリー加工品等の製造・販売＞

山ももの家が、市川ファームさんから原料としてブルーベリーを仕入れ、山ももの家の自社製品として、ブルーベリーの加工品を製造・販売し、外部からの作業委託に頼らない収入源の確保を目指した取り組みを行っている。

これまでに、支援員さんが県の「工賃等向上アドバイザー事業」を活用して、ブルーベリー加工品の製造に関する技術を身に付け、現在はジャム等の製造販売に向けて準備をしている。

今後の展望としては、B 型事業所の強みを生かして、収益追求にこだわらないような販売をすることで、販売量、販路を拡大し、市川ファームさん側が収益を見込めるブルーベリーの出荷先としても、大きな役割を担いたいと考えている。

また、ブルーベリー加工品については、須崎総合高校の生徒さんたちに新たなレシピ開発を依頼しており、今後、地域を巻き込んだような農福連携、障害者の社会参加等に繋がっていけば、とも考えている。